

若い時代に北ドイツで勉強していた時、貧乏学生であった私がリフレッシュするための経済的な手段は、町のバスに乗って郊外のバスターミナルまで出掛け、そこで自然豊かな周辺をひたすら歩きまわることであった。バスを降りて散策する中で、目の中にまた耳の中に飛び込んでくる周辺の事物に身を委ねたり、あるいは思いつくままにいろいろな想念の世界に浸ったりして、身体と心の柔らかさを取り戻したものである。この習慣は今も続いているが、最近散策中にしきりに頭の中を駆け巡るのは日本の私立大学のありようである。少子社会にあって、50年近く前の団塊の世代の当時からすると、18歳人口はその40%にまで減少している。しかし日本の私立大学は増え続け、現在は600を超える数に達し、その結果、過当競争の中で経営の継続が困難になる学校も出てきている。

周知のように、欧米列強の波に洗われ、



## 私学と志

開国を強いられた明治期の日本では多くの私立学校が設立された。官立ではなく私立であることに意義を認めて、1875年に誕生したわが同志社もそのうちの一つである。創立者の新島襄は、幕末から明治初期の10年に及ぶ期間を米国・ニューイングランドで過ごし、1874年に帰国した。

新島は、滞米中に洗礼を受け、フィリップスアカデミー、アマースト大学、アンドーヴァー神学校という3つの私立学校で学んだ。それらの学校はアメリカ建国の歴史にその名を刻む、ピューリタン、プロテスタント会衆主義キリスト教徒が自分たちの子弟の教育のために設立した学校であった。この環境に育まれた新島にとって、新しい日本の形成には教育こそが枢要であること、そしてその教育機関はキリスト教的人間理解に基づき、そのためには米国で彼が学んだ諸学校のように私立学校でなければならなかった。

帰国翌年に京都に設立された同志社英学校は、しかし、経営に辛酸をなめることになる。

1888年、新島は弟子の徳富猪一郎（蘇峰）の助けを得て「同志社大学設立の旨意」を公にし、同志社教育の賛同者を求めた。そこで彼は「素より資金の高より云ひ、制度の完備したる所より云へば、私立は官立に比較し得可き者に非ざる可し」と告白しつつ、しかし、私学でしかなし得ないこととして、「我れ自から我事を為すの原則」に基づいてこそその教育は懇切で「周到に行き届く」と主張する。

さて、日本における私立大学への国からの補助金と国立大学への交付金との間には、比べようもない差が存在する。とりわけ、旧帝国大学への交付金は、600ある私立大学への補助金に匹敵する現状がある。財務面を念頭に置けば、近年の大学ランキングのように画一的な基準で序列が決められていくことに違和感を

## 水谷 誠 ● 学校法人同志社理事長

禁じ得ない。

日本の私立大学の課題に思いを向ける時、これもまた比べようもないもう一つの差異の前に立ち尽くす。日本の私立大学では、収入のおよそ4分の3を学生納付金に依存している。米国の名だたる大学も私立大学であるが、そこでは納付金の予算に占める割合は平均して4分の1ほどだと言われる。この差異の背景には、寄附文化の違いがあると指摘されている。

思い返せば、同志社も創立以来、いかに多くの人々の篤志によって支えられてきたことか。創立の地、今出川キャンパスにある5つの重要文化財は全て、草創期の支援者による篤志がなければ存立しないものであった。日本の私学の発展のためには、建学の精神に賛同する支援者、すなわち校友、同窓、ご父母他ステークホルダーへの顕彰の気持ちをも今一度確認する必要がある次第である。